

第 21 号…令和2年1月

協会だより



一般社団法人 関東地域づくり協会

3 新年のご挨拶

4 子年 年男、今年もよろしくお願いします。

6 関東地域づくり協会からのお知らせ

第32回 道のある風景写真コンクール

令和元年度 関東地方防災エキスパート支部別講習会

令和元年度 地域づくり講演会

関東・水と緑のネットワーク 令和元年度交流会

10 プロジェクトK³⁹新宿駅南口地区を
快適で豊かな交通結節点に

新宿駅南口地区基盤整備事業（国道20号新宿跨線橋架替え、バスタ新宿）

14 関東の宿場町②

日光街道 杉戸宿 埼玉県

16 関東の土木遺産³⁹

足利市近代水道施設群 栃木県

18 会員のひろば

奥深き“どじょう掬い”

19 会員情報

新会員紹介・お悔やみ

編集委員会だより

20 ピックアップ 関東の道の駅⑦

周遊の玄関口として
手賀沼周辺の魅力をたっぷり紹介！

道の駅「しょうなん」

表紙の言葉

やぎさわかずと

八木澤和人さん（元日光砂防事務所 副所長）

湯西川温泉かまくら祭り

湯西川ダム上流の湯西川温泉では、毎年かまくら祭りが行われます。1月31日(金)の夜から3月1日(日)に開催予定ですが、今年は雪が少なく、開催が案じられます。写真は、平家の里会場で大きなかまくらと茅葺屋根を撮りました。近くでは、河川敷でミニかまくらの幻想的な景色も見られます。マイカーでお越しの場合は冬用タイヤが必須です。土日・祝日はとても混みます。時間に余裕をもってお越しください。



理事長挨拶 新年のご挨拶

(一社)関東地域づくり協会 理事長
奥野晴彦



令和2年の年初に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

昨年は、天皇陛下の即位に関連する諸行事が、国内はもとより世界各国の多くの方が祝福する中で行われ、新しい令和の時代が晴れやかにスタートしました。また、オリンピック、パラリンピックに先立ち、ラグビーワールドカップが、多くの人々の熱気と興奮の中で成功裏に開催されるなど、世界各国から、我が国が注目された年でありました。

一方、残念なことに、相変わらず、災害の多い年でもありました。特に関東では、台風15号、19号が相次いで上陸するとともに、台風21号も直近を通過したため、甚大な被害を受けました。今まで経験したことのない暴風、豪雨により、多くの家屋、構造物が倒壊する風害、河川の氾濫、土砂災害など、ありとあらゆる災害が発生しました。これらの災害により、多くの人命が失われるとともに、家屋などの資産をなくし、未だに不自由な生活を余儀なくされている方もいらっしゃいます。なくなられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災された方に、心よりお見舞い申し上げます。

この災害に際して、地方整備局の現場の皆様の活躍、特に全国各地から参集されたテックフォースの活動は、目を見張るものがあり、その存在意義を改めて多くの人々に印象づけたとのこと。併せて、防災エキスパートの皆様にも大いに活動していただきました。

現役時代に培った施設に関する知識、土地勘などを活用され、各方面の期待に応えていただきました。深く感謝いたします。

このような災害に対処するため、国の予算面では、令和元年度補正予算と合わせ、新年度予算においても、災害復旧、復興、強靱な国土を形成するためのインフラ整備などの手当がなされようとしています。令和2年度予算政府案では、国土交通省の公共事業関係費は、前年度比13%の伸びとなっています。この伸びに相当する部分は、臨時特別の措置となっていますが、強靱な国土を形成し、国民生活の安全と経済の活性化を進める上で必要なインフラを着実に整備、管理するためには、引き続き、十分な予算手当が必要であると考えます。

今回の災害では、ハッ場ダムをはじめとする利根川上流ダム群など、これまでに整備された多くの施設がその機能を遺憾なく発揮し、これらの施設の有効性が多くの方々に

理解されたところ。インフラへの理解が深まったいま、これらの施設にとどまらず、引きつづき良好なインフラを整備・管理していくことが重要であることを多くの人に理解していただくよい機会だと考えます。協会としてもこのような活動をしっかりと進める必要があると考えます。

さて、今年はいよいよオリンピック、パラリンピックが開催されます。昨年と同様に、あるいはそれ以上に、我が国が世界各国から注目される年になります。多くの訪問者が想定されますが、この方たちに、我が国の美しさ、居心地の良さを実感していただくことは、今後の我が国への訪問者の増加を着実なものとする上で、大事なことです。そのためにしっかりと機能するインフラも重要な役割を果たします。

様々なインフラをしっかりと整備・管理することがますます重要になる中、一方では、それを支える人材の不足が顕著になっています。来年度は、減少し続けていた整備局の定員も純増になるとの朗報もありますが、しっかりとした体制を構築するためには、この措置も継続していく必要があると考えます。また、市町村においては、インフラを支える人材不足は、引き続き深刻なものとあります。このような情勢下にあって、優れたノウハウを有する協会の役割はますます大きくなって参ります。

協会の最重要事業である防災事業においては、防災エキスパートの活動支援、防災は地域全体として取り組むことが必要であることなどの防災意識の向上、防災技術の伝承、などの活動に加え、必要な資材の備蓄についても検討を進める必要があります。地域活性化についても、防災の観点から検討を進める必要もあるでしょう。インフラの整備・管理に関しては、これまで培ったノウハウを生かし、事業の円滑な推進のためのPPP事業への参画、良好な品質の確保への貢献に積極的に取り組みます。これらの事業をはじめ、協会に期待される様々な事業を推進します。

新しい時代にふさわしい地域づくりの要請に応えるため、職員全員総力を挙げ取り組んで参りますので、会員の皆様には、これまで以上にご指導、ご鞭撻をお願いいたします。

終わりに、今年が皆様にとって素晴らしい年となることを祈念して、年初のご挨拶といたします。

2020

子年



年男、
今年もよろしく
お願いします。



これから起こること、 心老いずに観ていこう!!

昭和23(1948)年生まれ

小林豊さん

サイレキ建設工業(株) 技術顧問
元下館河川事務所長



新年あけましておめでとうございます。

おかげさまで、今年6回目の年男(昭和3回、平成2回、令和1回)を迎えることができました。健康に産んでくれた母や、支えてくれた家族のおかげと感謝しています。また、干支の庚子(かのえね)は、変化が生まれる状態、新たな生命が芽生え始める状態だそうです。私も何か新しいことにチャレンジしたいと思っています。

今年は、夏には待ちに待った第32回東京オリンピックとパラリンピックが開催されます。昭和39(1964)年16歳のとき、第18回東京オリンピックをテレビや記録映画で観て大興奮した自分ですが、今回の東京オリンピックで世界のアスリートたちの競技を観ることを大変楽しみにしています。オリンピック観戦や観光のため、海外から大勢の観光客が来日しますが、日本の国際的評価が高まると良いですね。

また、前回の東京オリンピックを契機に日本社会が発展したように、今回も有形・無形のレガシーが残されることや「働き方改革」も進められることから、日本社会も新たな形に変貌・発展していくと思います。今まで以上に高齢者や弱者に優しい社会になると良いですね。

今年の私は、寄る年波を受け入れながら、なるべく心は老いずに世事に親しみ、健康保持として朝の散歩と気まぐれ低山トレッキングを続けていきたいと思っています。

趣味としては特に語れるものではありませんが、プチ旅行やカラオケ、孫たちとのふれあいなど思いついたことをいっぱい楽しみたいと思っています。

むすびに、今年が自然災害の少ない、穏やかな年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

鼠のように駆け回ってきた 人生、今も(^_^);

気象予報士の
今村涼子さんと

昭和35(1960)年生まれ

登坂新次さん

関東建設マネジメント(株)
元利根川ダム
統合管理事務所副所長



新年あけましておめでとうございます。

一昨年4月に国土交通省を早期退職し、6月に第2の職場へ勤め早1年半経ちました。公務員時代に忘れない節目がありましたので、自分の振り返りも兼ねてご紹介いたします。

まず「昭和61年台風10号による小貝川堤防(赤浜・高須)決壊」に直面し、緊急復旧と災害復旧に携わる貴重な経験と出会い(仲間と先輩方々)があったことです。次は、荒川下流工事事務所工務課にいたとき、阪神・淡路大震災の影響で荒川堤防耐震対策補正予算が約200億円付けられ、調査・設計・地元説明・工事発注と所内一丸になって業務を遂行したことです。まさしく“ONE TEAM”で各担当課現場と連携しまし

た。最後の一つは、「ハッ場ダム建設事業」に携われたことです。生活再建事業に関わり、地元回りおよび説明会などがむしゃらに対応した日々は忘れることができません。説明会が年間200回ほどあった時期もありました。今も長野原に行くと「登坂くん」「登坂さ〜ん」と声を掛けてくださいます。地元は長きにわたり大変な思いをされてきましたが、今と一緒に語ることができるのはとてもありがたいことです。公僕という立ち位置をしみじみと思った期間でした。

語り尽くせない40年をリセットし、今は乙の立場で日々研鑽しております。現在「危機管理」担当という立場がなくなり多少心のゆとりが増えたので、在住するみなかみ町の「さなざわ里山だんだんの会」でライフワークをエンジョイしながら、ふるさとにお手伝いできることを模索している日々です。

今後ともよろしくお願いいたします。

Re-born

昭和35 (1960) 年生まれ

し たら
設楽隆久さん

(株)建設環境研究所
元道路部道路保全企画官



新年あけましておめでとうございます。今年60歳を迎えますが、気持ちはまだまだ若いもりの設楽です。

昨年、38年間務めた国土交通省を無事退職いたしました。これもひとえに皆さま方のご支援のおかげと感謝しております。

そして6月から(株)建設環境研究所に勤務し、これまでと違った立場で仕事をしております。今年は、環境の変化をしっかり受け止め、仕事、健康、趣味について、生まれ変わった気持ちで楽しく過ごしていこうと思っています。

それでは、今年の抱負（やりたいこと）を3つ述べさせていただきます。

- ・まず初めは真面目に仕事についてです。関東地方整備局との信頼関係をさらに強め、高品質の成果を目指したいと思います。
- ・次に健康についてです。昨年は夏から初冬にかけて3度も風邪をひくという軟弱な体であったため、ゴルフなどの運動を行い、体力強化を図りたいと思います。
- ・最後は趣味についてです。学生時代から続けている

フォークギターによるライブ活動ですが、高崎市が地域振興として行っている「おとまちプロジェクト」に参加し、月1回のペースで路上に立ちたいと思っています。もし市内で見掛けたら声を掛けてください。

以上の3つについて、無理のない範囲で行い、楽しく過ごせればと思っています。

本年もよろしくお願いいたします。

再び新しい・12年の始まり、 飛躍の年に！

昭和47 (1972) 年生まれ

奥山誠さん

(一社)関東地域づくり協会
総務部用地課技術主任



皆さま、あけましておめでとうございます。

早いもので私自身、4度目の干支を迎えることになりました。

協会に採用されてから用地業務一貫で現在に至っておりますが、採用当時は知識も乏しく、体力任せで業務に従事していたことを思い出しました。当時の上司はヒヤヒヤしながら見届けていてくれたことでしょう。当時の上司や同僚には今でも感謝しております。

今年の干支である子は、干支の中で一番目に数えられる動物であり、再び新しい十二支のサイクルが始まる年であることから、仕事やプライベートにおいて心機一転できる機会であろうと思います。

株式市場においても「子年は繁栄」という格言があるそうですが、今年開催される東京オリンピック・パラリンピックがその象徴となりそうなことから、協会に関わる皆さまにとっても飛躍できる年になるのではないかと期待を寄せています。

48歳になり、小さい文字が見えない、人の名前が思い出せないといったことがあります。今年で8年連続皆勤賞という偉業を続けている長女（中学2年生）に負けないよう、私自身も、公私共々頑張っていきたいと思っていますので、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

第32回 道のある風景写真コンクール

私たちの生活に欠くことのできない道。小中高校生を対象とした「道のある風景写真コンクール」も今年度で32回目を迎えました。

今回も旅先での写真、動物とのふれあいの写真、工夫して撮影した写真など、いろいろな一瞬を切り取った「道」のある風景の写真を応募いただきました。

今回は総数4,434枚、2,225人の方から応募があり、写真家の木村恵一先生、加藤雅昭先生、そして関東地方整備局道路部の伊與田弘樹道路情報管理官、当協会の後藤敏行専務理事の4名による審査で入賞作が決定しました。

入賞作品は関東の道の駅、千代田区役所ロビーなどで展示を予定しています。

主催：(一社)関東地域づくり協会／協力：ビックカメラ



審査風景

金賞

中学校の部

「光の交差点」

中嶋深容 (なかしま みひろ)さん
千葉県 松戸市立第五中学校1年生



「早くつながれ ぼくのまちの道」

甲本泰彪 (こうもと たいと)さん
神奈川県 横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校3年生

小学校の部

高等学校の部

「飛んでいけ!」 宮前壮志 (みやまえ そうし)さん

群馬県 群馬県立前橋工業高等学校3年生



学校賞

小学校の部	横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校
中学校の部	松戸市立第五中学校
高等学校の部	共立女子高等学校

銀賞



小学校の部

「かさの道を歩く」

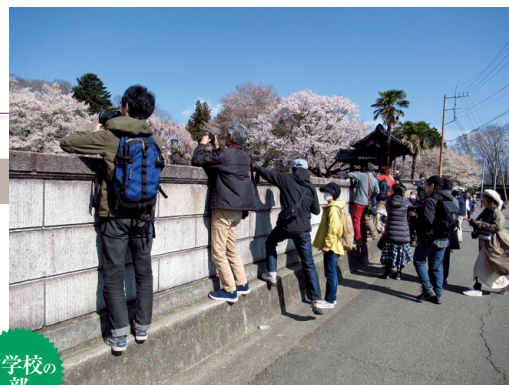
園部柚玲彩 (そのべ ゆいさ) さん
茨城県 茨城大学教育学部附属小学校3年生



小学校の部

「散歩道」

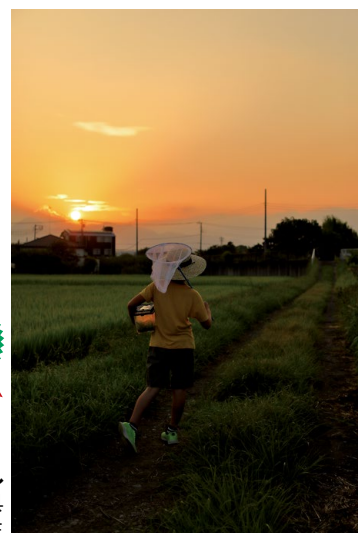
鈴木真智香 (すずき まちか) さん
茨城県 茨城大学教育学部附属小学校5年生



中学校の部

「塀の向こうに何かある」

加藤広太 (かとう こうた) さん
神奈川県 相模原市立共和中学校1年生



中学校の部

「少年時代」

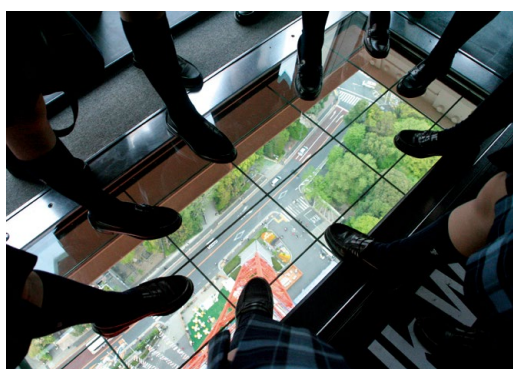
原田淳平 (はらだ じゅんぺい) さん
神奈川県 開成町立文命中学校2年生



高等学校の部

「瞳の奥に…」

佐藤玲菜 (さとう れな) さん
東京都 共立女子高等学校1年生



高等学校の部

「私たちの時代」

小田璃乃 (おだりの) さん
東京都 富士見高等学校2年生

ビックカメラ賞



小学校の部

「山頂を目指す」

坂本秀悟 (さかもと しゅうご) さん
神奈川県 横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校6年生



中学校の部

「僕もゴールしたよ。」

山下まりあ (やまた まりあ) さん
神奈川県 二宮町立二宮西中学校1年生



高等学校の部

「硝子に閉じこめて」

岸野竜也 (きのの たつや) さん
東京都 都立杉並工業高等学校2年生

令和元年度
関東地方防災エキスパート支部別講習会を実施しました

平成21年4月28日付で当協会（当時関東建設弘済会）と国土交通省関東地方整備局との間で締結した「関東地方防災エキスパート」制度に関する協定に基づき、防災エキスパート活動の円滑化を目的として、支部別に講習会を実施しています。

今年度は、台風第19号の影響により講習会開催が危ぶまれましたが、関東地方整備局および関係事務所のご協力により、11月20日（水）の甲府支部の講習会を皮切りに、12月11日（水）の宇都宮支部まで、すべての支部で無事講習会を実施することができました。

講習会には全支部で280名の防災エキスパートに加えて関東地方整備局・事務所職員の方々約80名、事務局も含め、約400名が参加しました。

また12月4日（水）の四支部合同講習会では、会場「そなエリア東京」の1階エントランスホールにて、関東地方整備局によるTEC-FORCEパネル展示が行われ、参加された防災エキスパートの他、一般来場者も熱心に見学していました。



■ 四支部合同講習会

- (1) 国土交通省の防災・減災施策
～関東地方整備局における取り組み～
牛腸宏氏（関東地方整備局総括防災調整官）
- (2) 講演
「近年の大規模災害とTEC-FORCE活動及び防災エキスパートの派遣体験」
鶴巻和芳氏（国土防災技術（株） 関東支社参事）
- (3) 講演
「東日本大震災における東北地方整備局の対応について」
川嶋直樹氏（元東北地方整備局企画部長（東日本大震災当時）、古河機械金属（株） 顧問）



四支部合同講習会

「そなエリア東京」エントランスホールでのTEC-FORCEパネル展示の様子
(写真提供:関東地方整備局)

令和元年度 関東地方防災エキスパート支部別講習会実施状況

支部名	参加者数	実施日	講習会場	関東地方整備局講師	現地視察・講演等
水戸支部	28名	11月22日（金）	土浦亀城プラザ	中崎薫氏（防災室建設専門官）	東関東自動車道水戸線 川尾地区函渠工事現場
宇都宮支部	16名	12月11日（水）	宇都宮市文化会館	中澤一信氏（防災室課長補佐）	国道4号 野崎橋（災害応急復旧箇所）
高崎支部	34名	11月28日（木）	ビエント高崎	菅原宣治氏（防災室課長補佐）	講演：鶴巻和芳氏「近年の大規模災害とTEC-FORCE活動及び防災エキスパートの派遣体験」
大宮支部	67名	12月 4日（水）	東京臨海広域防災公園 「そなエリア東京」	牛腸宏氏（総括防災調整官）	講演Ⅰ：鶴巻和芳氏 講演Ⅱ：川嶋直樹氏 「そなエリア東京」施設見学
千葉支部	67名				
東京支部	9名				
神奈川支部	21名				
四支部合同計	164名				
甲府支部	21名	11月20日（水）	ベルクラシック甲府	飯塚洋二氏（防災室建設専門官）	中部横断自動車道（時雨沢川上部工事）
長野支部	17名	11月27日（水）	ホクト文化ホール	太田孝二氏（防災管理官）	講演：吉谷純一氏（信州大学工学部水環境・土木工学科教授）「令和元年台風第19号千曲川災害の現状」
合 計	280名				

令和元年度 地域づくり講演会を開催しました

12月19日（木）、さいたま市民会館おおみやにて、当協会主催、国土交通省関東地方整備局の後援をいただき、石原康弘関東地方整備局長と、国土交通省前事務次官の森昌文顧問のお二人を講師にお招きして地域づくり講演会を開催しました。

当日は、関東地方整備局職員や地方公共団体職員、協会会員の皆さまなど約230名の方にご参加いただきました。

石原局長には「関東地方整備局をめぐる最近の話題～社会資本のイノベーション～」と題して、新技術活用に関する取り組み状況や今後の展開などについて御講演し



地域づくり講演会
当日の会場

ていただきました。森顧問には「地域を元気にするために」と題した講演で、都市伝説（業務遂行上の思い込み等）を交えた御講演をしていただきました。

講演後の参加者アンケートでは「最新の技術革新や取り組みについてよく分かった」「今までやってきた方法、概念にとらわれるのではなく、広い視点で仕事を進めようと思った」などの感想が寄せられ、両講演とも大変勉強になった様子でした。

また今後期待するテーマとしては、防災や環境、事業評価等に関するものへ要望がありました。当協会では、これからも会員の皆さまの期待に応えられる講演会を実施していきたいと思います。



石原康弘関東地方整備局長



森昌文国土交通省顧問

令和元年度 公益助成事業紹介

関東・水と緑のネットワーク 令和元年度交流会

当協会では、公益財団法人日本生態系協会と共催して、関東地域の身近な風景や自然、人とのかかわり・つながりを創出する拠点を、「関東水と緑のネットワーク拠点」（旧「関東水と緑のネットワーク拠点百選」）として選定し保全活動を支援してきました。

第1回から第11回までに選定された拠点はのべ119箇所。いずれも各団体によって良好な自然環境が保全されてきました。これまでに選定した拠点および活動団体のつながりを深めるため、平成28年度から選定団体を対象とした交流会を開催しており、保全活動での悩み、創意工夫などの情報交換の場となっています。

令和元年度は12月8日（日）に、東京都清瀬市の中清戸地域市民センターにおいて開催。午前中には、柳瀬川（金山調節池の自然再生）の現地見学会を行い、都会に残されているビオトープを見学し、午後には第11回の選定団体への選定証授与式と、第3回選定団体の金山調節池ワークショップの活動報告、今回選定された団体による活動報告が行われました。

令和元年度選定団体

- ・逗子名越緑地里山の会
- ・金光院SATOYAMA環境保全Group
- ・NPO法人自然塾丹沢ドン会
- ・公益財団法人グリーントラストうつのみや
- ・北浦周辺の自然再生を進める会（ふゆみずたんぼプロジェクト）



第11回で選定された
団体の方々

午前中の
現地見学会の様子



新宿駅南口地区を 快適で豊かな交通結節点に

新宿駅南口地区基盤整備事業

(国道20号新宿跨線橋架替え、バスタ新宿)



会員の方々に携わったプロジェクトの地を再訪していただき、
苦勞や喜び、エピソードさらには事業全体の効果などを語っていただく本シリーズ。
第39回は、新宿駅南口地区基盤整備事業に携わった
鮫島寛さん、瀧浪慎一さん、佐久間博之さんにお話を伺いました。



鮫島寛さん

日工建設株式会社技術部長。
昭和46年入省、平成23年退職。



瀧浪慎一さん

日本工営株式会社コンサルタント
国内事業本部東京支店技師長。
昭和54年入省、平成26年退職。



佐久間博之さん

戸田建設株式会社土木営業統轄
部技術部長。昭和61年入省、平成
29年退職。

① この道路全体が跨線橋。道路幅員は30mから50mに、歩道幅員は5mから最大15mに広げた。「新宿駅は350万人ほどが毎日乗降します。スムーズに移動できるよう、歩道を広くしました」(鮫島さん)



② 施工前の歩道(平成8年頃)。人波で進むのも困難だった
(写真②⑤⑥⑦は東京国道事務所提供)

③ 当時の苦勞について思い返す。「日本有数の商業地だけに、駅周辺の商店街との調整にも苦勞しました」と瀧浪さん



④ バスタ新宿を背に、甲州街道の交通を見守る鮫島さん、佐久間さん

老朽化した跨線橋架替えに伴う総合的な整備計画

平成28年4月、「バスタ新宿」(新宿南口交通ターミナル)が開業した。新宿駅の南口と直結する、高速バス、タクシーのターミナルである。新宿駅西口周辺に点在していた高速バス乗降場と、一般国道20号(甲州街道)の交通渋滞の原因の一つとなっていたタクシーの乗降所を集約したこのターミナルの完成により、新宿駅南口地区は、以前に増して大勢の人が行き交う拠点として活気づくこととなった。

この新しい交通結節点の整備は、新宿駅南口に面する一般国道20号新宿跨線橋老朽化対策の架替え工事に端を発したものである。

新宿跨線橋は、JR東日本および小田急電鉄の線路と、駅周辺の街路の上空に架かる幅30m、延長217mの道路橋であり、特にJR線路上空の部分は、大正14(1925)年に架設されたものだった。昭和33年頃、前回の東京オリンピックを契機に一部補強されたものの老朽化が激しく、耐震基準も満たしていないことから架替えが急がれてい

た。

同時に、新宿駅南口に面したこの跨線橋は、前後の幅員と比べて車道歩道ともに幅員は狭く、慢性的な渋滞も問題となっていた。

新宿跨線橋の架替え工事が事業化したのは平成6年4月。平成5年度から平成8年度まで、東京国道工事事務所(当時)の建設監督官として、跨線橋架替えに伴う一連の事業に携わった鮫島寛さんは、事業の経緯を次のように説明する。

「この工事は、日本最大級のターミナル駅である新宿駅の真上が現場になります。一日中、多数の電車が入ってきますが、これを止めることはできません。また、国道20号の新宿駅南口周辺は非常に交通量が多く、これも通行止にするのは困難です。スペースも限られていますから、建設機械の作業場や資材置き場、迂回路設置のために、まず線路の上空に作業構台(仮設橋梁)を作ることになりました。その作業構台は大規模なもので、せっかくならこれを撤去せず利用できないかというところから、新宿駅南口駅前の『道路の交通渋滞対策』と『歩行者のゆとり空間の少なさ』、駅と高速バス関連施設との『乗り換



5

⑤ 作業構台の柱となる部分は、JRの線路を少しずつ移送しながら施工した。「機械も入ったが大部分が人力。終電から始発までの約3時間半が主な作業時間で、一晩で約1,500人が作業することもありました」(佐久間さん)

⑥⑦ 跨線橋施行中の様子。事故のないよう、また交通の流れを止めないよう、迂回路への誘導も数十分で行うなど苦勞が絶えなかった



6



7

⑧ 建物の土台となる部分と道路では材質が違うため夏季の伸縮率が大きく違う。それを解消するジョイント部の材質にも気を使った



8



9

⑨ 「都心側の高架橋取付部工事の間、歩道がなくなるのをカバーするため、シールド工法で短い地下通路をつくりました」(佐久間さん)。現在は新宿駅と新宿四丁目を結ぶ通路として利用されている

え機能の乏しさ』を補完するための一体的な整備計画へとつながり、さらには新宿駅周辺の回遊性の確保も求められることになったのです」

平成7年8月には識者を集め「新宿駅南口地区基盤整備計画調査委員会」を設立。どれくらいの規模にするか、どのような施設が必要かを検討し、JRの線路上に人工地盤を設け、ゆとり空間・駐車場等の交通広場とJRビルを一体的に整備するという方針が決まった。そこからさらなる検討の末、交通結節点としての駅の機能強化や、新宿駅東西への歩行者の回遊を促進する歩道・空間の整備など、新宿駅南口地区を大きく生まれ変わらせる「新宿駅南口地区基盤整備事業」へと至るのである。

当初はこの“新宿プロジェクト”専任は鮫島さん一人。具体化に向けての協議のため、当時は丸の内にあったJR東日本本社へと、週3回は自ら足を運んでいたと話す。

関係する鉄道会社、商業施設などだけでなく、敷地がかかる新宿区・渋谷区や警視庁など、歴代の担当者が多方面との調整に奔走する日々の始まりだった。

車の通行、電車の運行を妨げないよう苦勞した跨線橋架替え工事

鮫島さんは東京国道事務所の副所長として、再びこの現場を管理する立場となったのは平成12年から13年にかけてのこと。「かなり形になってきていると感じましたね」と鮫島さんは振り返る。

跨線橋が着工したのは平成12年2月である。

工事の手順はこうだ。まずは古い跨線橋の南側に、柱を設置して作業構台（人工地盤）を作る。そこに迂回路をつくり、交通をできるだけ止めないよう数十分で国道20号の流れを迂回路に切り替える。その後、旧跨線橋を撤去して、新しい跨線橋を架ける。この流れを聞くだけでも、細心の注意が求められる、大変な工事であったことがうかがい知れる。

瀧浪慎一さんは平成13年度から平成15年度まで事業対策官として、佐久間博之さんは平成15年度から平成16年度まで建設監督官として、“新宿プロジェクト”事業に携わった。

「JR東日本の新宿駅と跨線橋はかなりの部分で一体的な施工となり、協議の機会は多かったです。なにしろ非常に多くの人々が利用する新宿駅の上空を整備するので、事故は絶対にあってはならないという緊張感がありました」(瀧浪さん)

「昼間は鉄道が動いており、柱や橋脚の施工はできません。終電が終わって始発電車が出るまでの数時間で施工しなければなりません。この夜間の施工ですが、実質3時間くらいしか作業時間がないのです。資材を遠くに置いておくことと取りに行く間も惜しいので、線路の地下に資材置き場と掘削した土砂の仮置場を作りました。これは後に新宿区から要望のあった新宿駅東西自由通路に利用すればいいということで、現在、JRが駅改修と併せて鋭



13 バスタ新宿の全貌。「新宿のこのあたりは緑が少ないので、壁面や屋上の緑化はぜひ取り入れたかったのです」(鮫島さん)。できる限り緑化を施し、憩いを創出している



10 11 12 バスタ新宿は4階が高速バスターミナル、3階がタクシー乗降場(一部バスが使用)。バスターミナルを利用する高速バスは1日に約1,700便に上る。ここから日本各地へと旅立つ外国人観光客の姿も多い



意施工中と聞いています」(佐久間さん)

平成12年4月には「新宿駅南口地区基盤整備事業」が事業化された。計画にあたっては法律に照らした立案をし、都議会の条件もクリアしなければならず、また商業施設や商店街とも調整して了解を取らなければならない。各所との調整には非常に苦労したという。地元の関心は非常に高く、小学校の体育館を借りて説明会を重ね、毎回100人以上が集まったそうだ。

瀧浪さんと佐久間さんが在籍した当時は、バスタ新宿の設計も進んでいた頃だ。

「建築のことはまったく知らないもので、用語にも戸惑いました。外観のデザインである“ファサード”と言われても“ファサードってなんだ?”という感じでね」(佐久間さん)

鮫島さんは、これより以前の基盤計画の調査段階で、JRや私鉄・地下鉄改札からバスターミナルへ誘導する計画を作ったが、これも大変だったと話す。

「今では、私が計画した当時に想定した以上の人が移動しています。もっとあそこを広くしておけばよかったなと思うところもありますが、やってみないと分からないところも多くありました」(鮫島さん)

新たな交通の要所誕生に伴い、 周辺の環境も一新された

瀧浪さんは現在の様子について「当時予想したよりも、多くの方がバスタ新宿を利用してってくれています」と話す。

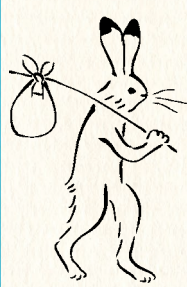
「各路線改札口がある地上2階から4階バスターミナルへ上がるエスカレーターで直行できるのがよいでしょう。計画時にも、導線(人の流れ)はかなり検討したので、それが実ったようでうれしい。併せて周辺のビルもきれいになり、街全体が生まれ変わったのは相乗効果だと思います」(瀧浪さん)

佐久間さんも「バスやタクシーへの乗り換えがスムーズになったことだけでも、目的は達成されたといえるでしょう」と振り返る。

「もうちょっとターミナルは広くてもよかったかもしれませんが、利用されることでさらに人が増えるのは仕方がないですね。今ではバスタ新宿を含むこの事業がモデルとなって、駅周辺に散らばっている高速バスやタクシーの乗降場を集約し、交通結節拠点化する『バスタプロジェクト』の全国展開が検討されているとのこと。事業が成功したからこそだと思います」(佐久間さん)

「国土交通省が目指す『都市再整備結節点事業』として初の取り組みで、先例がないための苦労もありました。線路上空にどうやって作業の場を確保するか。各所との協議はもちろん必要ですが、今回の場合は作業構台を人工地盤にしたことがそうですが、利用できるものを無駄なく利用した、よいモデルケースになったと思います。こういうやり方があるというモデルを示せたのは一つの成果でしょう」(鮫島さん)

日光や江戸へ 向かう人々が歩き、 記録に残した杉戸宿



江戸時代、東海道などの街道に設けられたのが宿場です。
旅人を迎え送り出した宿場の古今の様子を、
関東地方の各地に訪ねるシリーズ。
第2回は日光街道の
杉戸宿の様子を紹介します。



歌川広重「日光道中杉戸」
(埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵)

高札場跡から南に歩いて行くと、
再現された高札が立っている。
日光街道や杉戸宿の
解説が記されている



日光街道5番目の宿場町「杉戸」

今回ご紹介するのは、埼玉県東部の杉戸町にある杉戸宿です。日本橋からおよそ42km。日光街道を千住、草加、越ヶ谷、粕壁ときて5番目の宿場町です。

杉戸宿が宿駅として成立したのは、一般的には元和2(1616)年と考えられています。天保14(1843)年の『日光道中宿村大概帳』によれば、本陣が1軒、脇本陣が2軒、旅籠が46軒あったようです。町並みは、東西におよそ900mにわたって続き、町家や蔵が並んでいました。現在も本陣の門や古民家、神社、蔵などの建物が各所に残されており、今もなお生活の一部として使われているものもあります。日光街道沿いには、「杉戸宿開宿400年プロジェクト」の一環で再現された高札場があり、原文や現代語訳された内容が書かれています。街全体がミュージアムのようなものであり、当時の人々の息遣いが感じられます。

2つの街道が通る杉戸町

五街道は、徳川家康が幕藩体制を盤石なものにするために整備されました。日光街道は日本橋から日光へと続く道で、宇都宮で奥州街道と分岐します。杉戸宿も、参勤交代や日光東照宮への代参のために大名や、旅をする庶民たちが多く行き交いました。

著名人も立ち寄り、過ごした様子が記録されています。渡辺崋山の日記『全楽堂日録』では、愛知県の田原藩士であった崋山が藩主の三宅康直に従い、將軍の代参として日光東照宮へ向かった様子が描かれています。崋山は杉戸宿に到着すると旅籠に泊まり、酒を飲み、同行者と旅の話に花を咲かせて過ごしたことを書いています。そのほかにも、十返舎一九の滑稽本『奥羽一覽道中膝栗毛』や、長崎県の平戸藩主であった松浦静山の随筆『甲子夜話』の「日光道之記」などにも杉戸の名が登場します。

杉戸町では年に1度、「宿場まつり」が開催されます。杉戸宿開宿をイメージした衣装を着た人々が列をなして歩く「杉戸宿時代行列」をはじめとしたイベントが目白押し。まつりのにぎわいととも、当時の人々や宿場町の活気に思いを馳せることができます。

杉戸町にはもう一つ、日光街道の脇街道である日光御成街道(現埼玉県道65号さいたま幸手線)が通っています。家康亡き後、彼の祀られる日光東照宮へ社参する將軍たちが通った道で、幸手宿の手前で日光街道と合流します。その道沿いには、当時築造された一里塚がいまほとんど原型を残したまま保存されています。ここまで原型をとどめた一里塚は埼玉県内でも大変珍しく、見ていると旅人たちがこれを目印に歩き、次の一里塚を目指した姿が思い起こされます。このように杉戸宿は、街中に当時の面影が残っているのです。



宿札。本陣での休憩や宿泊をする大名の名前を記し、本陣に掲げられた。①会津少将休②梶井宮御休③松平肥後守休④仙台少将休とある ※通常は非公開資料(画像提供:宮代町郷土資料館)



杉戸宿本陣跡。現在は門のみ残っている。この本陣は建坪166.5坪と大きな構えであった ※通常は非公開



街道沿いには古い建物が並び、往時の様子を醸し出している。
[上] 渡辺金物店跡
[右] 小島定右衛門邸



愛宕神社。杉戸町内にある香取神社、神明神社とともに、杉戸宿の鎮守として祀られている



杉戸町下高野にある日光御成街道一里塚。もとは向かいにもあったが、道路拡張により消滅。東塚のみ現存している



飲料水が不良のため 伝染病患者が相次ぐ

栃木県南西部に位置する足利市は、日本で最も古い学校として知られる足利学校が所在した街として有名です。また足利銘仙など織物の街としても名を馳せてきました。その足利市の上水道を担ってきたのが、今回ご紹介する選奨土木遺産・足利市近代水道施設群です。今福浄水場と緑町配水場からなり、1929(昭和4)年に着工。翌年12月に竣工しました。1世紀に近い歴史を誇る施設ですが、いまだに現役として稼働しています。

これらの施設が整備された背景には、当時の足利市の深刻な飲料水事情がありました。『足利市水道小誌』には次のように記されています。「本市の飲料井水は概して佳良でなく、専門技術家の調査する處に依ると(中略)數町の地域を除いては殆ど不良であつて、其の比率實に四二・七パーセントに及んでいる。その故か年々傳染病患者著しく猖獗を極め、他都市に比し多発の傾向あるを以て夙に市民は水道布設の急務を実感して居た(後略)」。

飲料水の水質が悪かった理由の一つが、当時隆盛を

極めた織物産業の影響です。関連する染色工業が盛んになり地下水を汚染していたのです。そのため工場が集中していた通六丁目、七丁目辺りは飲料水にすらこと欠いていたといいます。住民からは水道布設の声が挙がりましたが、財政的な面もありなかなか着工に至りませんでした。しかし1918(大正7)年3月、町務調査会規定の調査項目に「上下水道ニ関スル件」が初めて盛り込まれ、事業は本格化することになりました。

衛生面のみならず 防火面にも貢献する

1922(大正11)年から1925(大正14)年にかけて水源地の選定や水質の調査が行われました。この間、当時水道技術者として著名であつたにしおえださとの西大條寛、米元晋一等の指導を受け、最新の技術を投入した施設整備が進められ、1930(昭和5)年に完成したのです。

今福浄水場では渡良瀬川の地下水を汲み上げ浄化。その水を足利公園の小高い頂に位置する緑町配水場に送ります。緑町配水場からは自然流下により各戸に配水されるのです。この仕組みは今も変わらず、配水池や建屋な



関東の土木遺産 第39回

地域を支える装飾性豊かな施設

足利市近代水道施設群

栃木県

土木学会では現存する貴重な土木構造物を調査し、「日本の近代土木遺産」として発表しています。それら

の土木遺産の中でも特に価値があるとされる選奨土木遺産。第39回は栃木県足利市にある「足利市近代水道施設群」です。



配水池の脇にある水道山記念館。
管理事務所として使用されていた

接合井。浄水場と配水場
を連結する施設



緑町配水場の配水池

どの構造物、建造物も当時のものが使われています。

完成した水道施設群は地域の保健・衛生環境の改善に大きく寄与しましたが、さらに別の意義もありました。それは地域の防火対策面です。すでに述べたように足利は近世後期から織物の街として有名でしたが、明治になってからは政府の殖産興業政策により一段と発展。大正から昭和にかけては工場が多く誕生しました。

一方で、足利では火災が相次いでいました。明治以降でも大火は何度も起きています。発展する織物産業にとって防火は大きな課題となっていました。水道施設の整備はそのためにも必要なことだったのです。

そのため張り巡らされた配水管の口径は一時間最大給水量に消火用水量を併せて同時給水が可能のように考慮されています。消火栓も389箇所設置。放水能力を高めるために制水弁も56箇所設けられました。水道施設群は防火のための施設群でもあったのです。

豊かな装飾性も評価ポイントに

足利市近代水道施設群が評価されるのはこうした実用的な面ばかりでなく、その装飾性にもよります。今福浄

水場の装飾豊かなポンプ室、緑町配水場の配水池(装飾された石造り照明柱や六角形の保守点検入口棟)、半円アーチの窓の接合井、軒蛇腹の水道計量室などはゼツェッション(分離派)風のクラシックな意匠として目を引きます。配水池の隣りにある瀟洒な水道山記念館は、この地に行幸した昭和天皇の御座所でもありました。

同施設群は2015(平成27)年に選奨土木遺産として顕彰されました。施設群の価値について選考委員の福島二郎足利大学准教授は次のように話します。

「素晴らしいのは施設の整備が官民の連携で行われたことです。豊富で清涼な水道が欲しいという住民の強い希望が、行政とうまくマッチしました。繁栄していた当時の足利の財力も大きかったでしょう。だからこそ全国でも早い時期に、技術もデザインも最先端の施設を整備できたのだと思います。近代の華やぎを目に見えるもの、手に触れることのできるものとして、これからも地域の潤いに貢献していくことを願っています」

今福浄水場ポンプ室。アーチが優美な窓と入口左右のピラスターが特徴的



配水池からの眺望。
施設の石段を上ると足利市が一望できる

軒蛇腹が優雅な水道計量室



築造工事中の緑町配水場
(提供: 足利市水道局)



今福浄水場ポンプ室内部。地下から汲み上げた水を減菌し、緑町配水場に圧送する



このページは
会員の皆さまの
投稿によるページです

どじょう掬い踊りの起源

その昔、島根県安来地方で地元の若者が集まって酒を酌み交わす席で、安来節に合わせてどじょうを掬う動作を踊り、座を盛り上げたそうです。その後、明治・大正になり型が出来て、正調「安来節どじょう掬い踊り」として、全国に広まったそうです。

近年、各地に教室や保存会も発足して盛んになり、段位認定制度も確立されて熱心な愛好者が多くなっているようです。

どじょう掬い踊りとの出会い

以前通っていた「栃木県シルバー大学校」の入学式において、校長である栃木県知事が「2年間学んだ知識を生かし、卒業した後どんな方法でもよいので大いに地域貢献に活躍してほしい」と言われました。

そんな矢先、新聞の小さな活字が目に入ったのが、よみうりカルチャー教室の「どじょう掬い踊り」の講座

でした。勇気を出して飛び込み、1か月2回の教室で3年間練習を続けました。その間、年1回東京会場で開催される昇級試験にもチャレンジしてみました。

ボランティア活動

現在は、よみうりカルチャー教室で練習していた仲間の6人（男4人、女2人）でチームを立ち上げて、ボランティア活動をしています。年5～6回、市内のデイサービスやショートステイ施設を慰問して、笑いを届けています。約3分30秒の安来節の中に、一番目はめでたくどじょう掬った動作を、二番目は掬ったどじょうを逃がしてしまった動作を、三番目はヒルが足に吸い付いた動作を踊りで表現するのです。

1. わしが生まれは浜佐陀生まれ
朝まとうからどじょうやどじょう
2. おやじどこ行く腰にカゴ下げて
前の小川へどじょう取りに
3. 唄に千両の値ぶみがあれば
どじょうは万両の味がある

奥深き “どじょう掬い”



福島 昇

元宇都宮国道事務所副所長



観客を引き込む、全力の“どじょう掬い”

古銭を鼻に付けて、豆絞り手ぬぐいの頬かぶり、紺の着物にももひき姿、腰にビクを下げて、ザルを脇に抱えて、ひょこひょこ腰を振りながら客の前で、ニカッと笑えば拍手が湧く。

この瞬間から踊り手は乗ってくるのです。

カルチャー教室では、先生から、腰振りも大事、笑いも大事と厳しく指導されたものです。

これからも笑いを届けられるように、毎月1回集まって練習をして、チームの親睦を深めております。



市内のデイサービスやショートステイ施設を慰問して披露。利用者の皆さんに笑顔を届けます！

会 員 情 報

令和元年11月1日～
50音順・敬称略

新会員をご紹介します 新しく7名の方々が入会されました。これからよろしくお願いいたします。

氏名	現勤務先
阿部 悟	(一社) 全国道の駅連絡会
石川 治	西田鉄工(株)
進藤 崇	(株)近代設計
神保 悟	三陽技術コンサルタンツ(株)

氏名	現勤務先
田村 節子	(株)アーバン設計
畠山 慎一	(株)竹中土木
森山 裕二	国際航業(株)

お悔やみ申し上げます 8名の方々に心からご冥福をお祈り申し上げます。

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省)退職時職名
永井 文也	令和元年8月	大宮国道 副所長
早川徳一郎	令和元年9月	大宮国道 出張所長
大住 勝	令和元年10月	千葉国道 機械課長
宮坂 昌男	令和元年11月	長野国道 出張所長

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省)退職時職名
大島 宏市	令和元年11月	利根上 総務課長
吉武 隆	令和2年1月	東京国道 出張所長
小林 清	令和2年1月	総務部 契約管理官
大内 勲	令和2年1月	総務部 調整官

編集委員

● [関東地域づくり協会]

澤田晋
鈴木雄司
堤盛良
中村一夫
野橋明彦
前田隆徳

[会員]

望月美知秋 ((株) 日水コン)
田中良彰 (大成建設 (株))

編集委員会だより
2020年1月

今年(令和2年)は東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。日本選手の活躍を期待しましょう。

オリンピックの年は、閏年でもありません。太陽の周りを地球が1周する時間を1年(365日)としていますが、実際には365日24時間で、1年に0.24日多いため4年毎に1日増やして調整しています。

その年が閏年です。閏年の定義は「4で割り切れる年」「100で割り切れる年は対象外」「100で割り切れても400でも割り切れたら閏年」だそうです。

2020年は閏年ですが2100年は閏年ではありません。4年に1度1日多くすると1年で0.01日足りない分、100年で約1日足りなくなるため100年に1度閏年ではなくなります。さらにそれでも端数があり、その端数も考慮すると100で割り切れる年だとしても400年経つと1日多くしないと割が合わなくなるため閏年になります。

2000年シドニーオリンピックの年は400で割り切れるので閏年でした。

閏年の今年、会員の皆さまが健康で穏やかな年を過ごせますようにお祈りいたします。

(編集委員 T・M)

ピックアップ

第17回

関東の道の駅

周遊の玄関口として 手賀沼周辺の魅力を たっぷり紹介！



道の駅
しょうなん



手賀沼のほとりにある道の駅「しょうなん」。約3倍の規模へと拡張工事が進んでいる

手賀沼の南部に位置する道の駅「しょうなん」は平成13年4月に開業。人口約43万人の商業都市ながら市内の1/4は農地という柏市にあり、手賀沼周辺の資源を生かして人々の周遊を促進する「手賀沼アグリビジネスパーク事業」の中心的存在です。道の駅「しょうなん」の取り組みを紹介します。

農業を中心とした地域の魅力を発信！

柏市は、意外にも農業が盛んな土地柄。カブ、ネギ、ホウレン草は全国トップレベルの生産量を誇っています。しかし他の地域と同じく、後継者や耕作放棄などが課題となっていました。そこで地域活性化、農業政策の一環として柏市が取り組んできたのが「手賀沼アグリビジネスパーク事業」です。その中心的存在として活動を牽引してきたのが道の駅「しょうなん」です。

「手賀沼それ自体に加え、周辺の農家、里山、歴史・文化財など、今ある魅力的な資源（ハード面）を生かしながら、新たなアクティビティやイベント（ソフト面）を企画しています。農園での収穫体験や旬の素材を使った手作り体験などです。道の駅はイベントの場となるだけでなく、ここを拠点に地域へと周遊してもらう、いわば玄関口とイメージしています」と柏市役所経済産業部農政課の大滝由香里さんは、説明します。

収穫体験は、田植えや枝豆収穫、芋掘りなど年間を通して行われており、都心から子供連れで参加する人や、リピーターも増加中！ 道の駅の直売所には毎日新鮮な野菜が並び、地

元の人々も大勢が買いに訪れています。

「農業を支えるのは市民であり消費者である皆さん。どんな人がどう育てたかが見えるようにすることで、都市部と農村をつなぎたいのです」（大滝さん）

手賀沼周辺の文化や人々の暮らしも紹介。 隠れた観光資源を有効に活用

「柏市には、地元の人もあまり知らない文化、産業がまだまだあります。こんな面白い人がいる、伝統工芸があると、再発見してもらいたい」と話すのは株式会社道の駅しょうなん代表取締役社長で、手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会の会長も務める石橋良夫さん。かつては柏市に合併する前の沼南町役場に勤務し、道の駅設立にも尽力した石橋さんは、地域活性化にさまざまなアイデアを持っています。

「地域のメンバーが主体となって魅力を発信することで、地元の人々にも『自分も何かやってみよう』と参加してもらえるようになったらうれしいですね」（石橋さん）

平成30年度重点「道の駅」に選ばれたことで、活動にはさらに弾みがつきました。充実に向け、拡張工事が進んでいます。



（左から）柏市役所の小林紗和さん、道の駅しょうなんの石橋良夫さん、直売所の日原啓介さん、染谷信吾さん、柏市役所の大滝由香里さん。道の駅しょうなんを盛り上げるメンバーだ



落花生収穫体験



ブルーベリースイーツづくり、花火玉貯金箱づくりなど、手作り体験もさまざま



手賀沼周辺で活動する人々を紹介するリーフレット。若い人にも読んでもらえるようデザインにはこだわった。インタビューをまとめた冊子や1分動画も配信中！



季節の野菜や果実を練り込んだソフトクリーム。「どれもほかにはないおいしさ。ぜひ食べてほしい！」と小林さん



直売所には新鮮な野菜が並び

ほぼ毎月行われている農業体験。リピーターも増えている